

昭和46年2月1日 第3種郵便物認可  
平成22年12月1日発行（毎月一回一日発行）  
俳句雑誌 沖 第41巻第12号



俳句雑誌[おき]

12月号

沖 発行所

# 推敲跡

能村 研三

「沖晴れ」に勝るもの

「俳人・能村登四郎の水脈」展

登四郎に師系山脈小春風

冬日さす生原稿に推敲跡

咳一つして背後より抜かしをり

義士の日の妥協許さぬ会議あり

「沖」の行事を行う時は必ずと言ってよいほど誰もが口にする「沖晴れ」となるのだが、今度の四十周年の記念会では、それが効かなかった。十月の終わり頃は天気も安定して秋晴れの一日となるはずで、この時期を設定したのだが、珍しくも東京を指した台風の直撃予想。ぎりぎりまで、天気予報を気にしながら出かけることになったが、会場に向かう途中、これではどうも私自身が雨男のレッテルを張られそうだと思った。役員の集合は午前中早かったので、小康状態の間に会場の中に入ることが出来た。しかし、会員の皆さんが受付をする昼頃、お客様がおいでいただく五時頃雨脚が強くなるのではと心配であった。会場にも何人かの会員やお客様からも電話があり、交通機関が心配なので行くのを見合わせたいという連絡も入ってきた。

会場となった市ヶ谷周辺も一時的には雨脚が強くなったこともあったようだが、何とか足元の悪い中を多くの会員、お客様にお越しいただくことが出来たこともうれしかった。祝賀会の来賓として一番にご挨拶をいただいた、今回の文化勲章受

語る　こと　供養　となりぬ　冬　オリオン

プライバシー　保護　の　過剰　や　冬　ざるる

引用　に　引用　かさね　冬　旱

検索　の　言葉　引き　出す　鬼　火　より

歩道　攻め　といふ　商　ひ　歳　の　市

手　と　足　が　瞬　に　空　切　る　寒　き　朝

章者でもある有馬朗人先生からは「台風などは大いに歓迎すべきもので、この日が絶対忘れられない日になるだろう」という励ましのお話もいただき勇気付けられるものがあった。こんな悪条件の中を三百人を越える方々が集まっていたことは、私にとっては「冲晴れ」に勝るものを感じる事が出来た。

今回の四十周年記念事業、実行委員会のスタッフの皆さんと二年越しの準備を重ねて、この日を迎えることが出来たわけで、スタッフの献身的な力も頼もしかった。今回は、ご出席いただく会員の皆様お一人お一人に私の書いた短冊を差し上げることにした。スタッフの方々には心配をかけたが、大会の二日前に全部を書き上げることが出来た。また、企画展「能村登四郎の水脈」の図録も、夏からの大仕事であったが大会の日ぎりぎりに完成し皆様に見ていただくことが出来たのもうれしかった。

能村 研三



# 蒼茫集



峡の子 池田 崇

鳥威しとは奇をてらふ物ばかり  
峡の子は今も鳴子の引き役に  
腰砕けなる棒稻架の二つ三つ  
大胆にして細心の稲雀  
遂に子の離してしまふ鬼やんま  
菊花展菊の伊呂波を教はれり

潮照り 荒井千佐代

負ひ紐の擦れし胸の辺水の秋  
窯変の紺を深めて黍あらし  
ゆつくりと岸押すうしほ鷹渡る  
潮照りの耶蘇墓くづの花囲ひ  
葛裏葉島の哀史を聞きをれば  
銀漢や人を憎まば老い早し

勝 縁 大畑善昭

自性院開創二、一五〇年  
露眩しけふ勝縁の一会あり  
露にこゑ歴代先師おろがめば  
身に入みて法筵一座進めぬる  
聲明や秋の黄の蝶あまた飛べ  
衆僧の譜曲の唱和さやけしや  
われをもて古刹五十世芋茎干す

透き通る 田所節子

天気図のがらんとけふも酷暑かな  
露降りて虫の音いよよ透き通る  
パソコンの起動待ちぬる秋思かな  
玉子豆腐ふるんと盛らる秋ともし  
杖の母コスモスよりも揺らぎをり  
蓑虫の頭でつかち世をのぞく

指 図 吉田政江

準備万端台風の逸れてをり  
賜高音朝から指図されさうな  
二期作と見紛うてをり櫓伸ぶ  
秋天や市ヶ谷堀の一面鏡  
契約を白紙に戻し雁渡し  
消しゴムの角とれてをり文化の日

魚 拓 森岡正作

山割つて湖心へ釣瓶落しかな  
一仕事終へたる案山子連れ帰る  
顔映る分だけ暗く水澄めり  
阿蘇に生れ阿蘇に抱かれ馬肥ゆる  
コスモスのいつもどこ吹く風のやう  
魚拓みな修羅のごとくに秋逝けり

渾身の 辻 美奈子

子らとときに魚の類ぞ黍あらし  
敗荷を見し血を熱く献じをり

蛇穴に入るや水面をゆくやうに  
みせばやの咲いて微光をあつめをり  
神留守の甚兵衛鮫は回遊す  
渾身の色ありにけり冬薔薇  
模糊と 千田百里

皮膚感覚の模糊と八月過ぎにけり  
踏み入らば浮力が曼珠沙華の畦  
着流しの案山子仕事をせぬつもり  
新ばしり酌むに等級など要らぬ  
浦安の浦を縁どる夜長の灯  
あれは終電無月の鉄橋を渡る

秘 色 上谷昌憲

一雨去り通草は秘色つくしけり  
蔓引けば含み笑ひのあけびかな  
芋嵐時速五キロのトラクタ  
熱々の銀杏を剥く自足かな  
新宿の端ささくれていなびかり

ひよんの笛

北川英子

舟べりや月明掬ひては零し  
悼 栗城光雄氏  
北遠き告別の刻いわし雲  
秋ざくらさうかさうかと聞き流し  
力ーナビの急に黙りぬ葛の花  
芒原ここでしやがめば忘れらる  
伝説の父しか知らずひよんの笛

聞 耳

秋葉雅治

火の性はいのち短し曼珠沙華  
松茸の父子相伝の穴場かな  
聞耳を立てては秋思かかへ込む  
賞受くるまでの歳月菊作り  
石庭につるべ落しの余燼あり  
角立たぬやうにもと言ふ新豆腐

裸 婦 像

菅谷たけし

虫の音の闇の彼方へ耳澄ます  
曼珠沙華さびしき赤を重ね合ふ

水辺まで歩いて秋思つのりけり  
もの言はず閉ぢては開く秋扇  
地底六百よりの生還夜這星  
裸婦像はいつも一人や赤とんぼ

凝 固 剤

辻 直 美

茄子焼いて旨し一人の餉の寂し  
供へたるしばらく湯気の衣被  
曼珠沙華油に振りし凝固剤  
みちのくに血の繋がりや秋茜  
露草の真中の藍を愛すなり  
縄張つてつくる畑畝冬めきぬ

でんであら野

千 田 敬

鳥渡る等間隔に並ぶ椅子  
御御御付さう言ひました秋の朝  
鱗雲どれも等しくとはゆかず  
秋の夜の六千余句の厚さかな  
でんであら野とや月明の一本道  
芋名月窓とふ窓に配られて

良寛 安居正浩

五合庵へ坂ゆるやかに初紅葉  
良寛に恋のありなし蓼の花  
うろこ雲良寛堂は佐渡を背に  
水音をひときは高く下り簾  
コスモスの向うの山も揺れてをり  
秋茄子を噛めばひねくれたる音す

等身像 藤原照子

稲雀投網のごとくうねりけり  
小鳥来てをり蕉翁の等身像  
檜皮葺く竹釘口に天高し  
採血に眼のおよぎ秋の雲  
鉦叩等間隔に疲れけり  
大家族たりし生立ち青みかん

男同志 松本圭司

箆やぐらの柄に父の手の艶秋深む  
新蕎麦の緑すすると薫りけり

深酒も男同志や小鳥来る  
加餐をと祈られてをり竹の春  
菊人形龍馬にかなふ菊着せて  
朱の小菊着てお龍さん菊人形

航空ショー 久染康子

裾野村字薄原狐棲む  
航空ショー見る荒地野菊を褥とし  
咲く前の一糸纏はぬ曼珠沙華  
地べたに荷置いて他郷の秋まつり  
袴の紋整へて菊師去る  
薬缶酒を真ん中に据ゑいも煮会

次の音 松井志津子

大灘千葉県四街道に漁火ひとつなき良夜  
鳥わたる元禄地震の潮位板  
ファッション誌巫女の見てをり神の留守  
ばつたんこ次の音まで時溜むる  
自然薯を掘りて鳥獣保護区かな  
風音や灯して暗き梨番屋

# 潮鳴集

タイヤ庄

甲州千草

新米の積まるる度のタイヤ庄  
一等地拾ふ木の実にある微熱  
初紅葉等庄線の動き急  
無花果を次々摘みて暗い籠  
流れ星使ひし桶は伏せて出る

佳きこと

栗原公子

佳きことの待つ十月のカレンダー  
かりがねや空の広さを見よとこそ  
冬瓜汁うやむやといふ逃げどころ  
喪の帯を手熨斗にたたむ虫しぐれ  
詩から死へ思ひのめぐる星月夜

既視感 ( déjà vu )

鳥居秀雄

本郷に尾根や峠や鳥渡る  
マラソンのトップ集団曼珠沙華  
ビルつなぐ硝子の通路星月夜  
ホスピスの花壇につづく大花野  
ビル跡に既視感湧きてより秋思

窮屈さう

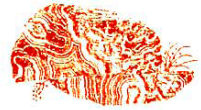
古屋

元

満月の窮屈さうなビル狭間  
水平となりし旅客機苜田晴  
翹たたみ秋蝶憩ふ車椅子  
鉛筆を残らず削り敬老日  
古酒に笑み新酒に微笑翔先生



# 沖作品



# 能村研三選

母の亡し玻璃いつばいの罫雲

大分

河野美千代

秋の夜やこの世を忘る脳となり

鳴くことも起承転結つくつくし

竹藪に今日の目印からすうり

秋燕の空鉄塔のみをつくし

畑のもの掘つて洗つて月を待つ

運河行く舟に揺れなき良夜かな

晩学の教材どさと小鳥来る

秋澄めり佐渡を引き寄す望遠鏡

秋気澄む半円形に日本海

ポケットに詰め込む小銭野分中

青柿やしづかに暮れて二人なる

豆腐屋の声よく透る野分あと

月白や湯呑を包むたなごころ

蓑虫やわれも通勤手ぶら族

神奈川

福島 茂

千葉

鶴見 遊太

新涼や座敷童子が添ひ寝する

山は神里は仏の草の花

曼珠沙華ころびたる咎せざる科

青みかん幼き頃の向う傷

雁渡し鉄瓶下してもたぎる

時刻表になきバスの来る花野行

空と同じ広さの花野独り占め

高原に祝婚の鐘秋気澄む

豊の秋ベルシヤ文様の皿瓶子

詩人の血欲る夜肅々にごり酒

石榴裂けこれからはじむ老支度

屈伸の指露冷えの土に触れ

シシカバブの煙ただよふ農具市

おぼばの畦に繰り出す稲架日和

追はるる数加へて追はるる稲雀

長崎

岩永 充三

神奈川

鈴木 浩子

市川市

和田 満水

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

母の亡し 玻璃いつばいの鯛雲

河野美千代

正木ゆう子の句に「兄亡くて夕刊が来る濃紫陽花」という句があるが、これは俳人正木浩一を詠んだものだが、本当は限りなく悲しくて淋しい時に、俳句でその感情をあらわにしては、本当の悲しさが読者に伝わらない。正木さんの句のように必要以上に感情をあらわにすることなく淡々と一句に詠むほうが何か読者の心を打つものがある。ところで、この河野さんの句も、正木さんの句と同じように悲しいことをことさら強調する句ではなく、母が今亡くなった部屋の窓から見える風景を淡々と詠んでいるのが、その悲しさを増大させる。なんと美しい空に広がる鯛雲なのだろう。きつと今旅立つた母もあの美しい空に向っているのだろうと思つたのだろう。

畑のものを掘つて洗つて月を待つ

福島 茂

中秋の名月に里芋を供えるという習慣がある。里芋は、この時期は収穫期の始めにあたり、この他にも、いろいろな作物が収穫の時期を迎える。月は、ほぼ二十八日で満ち欠けを繰り返して古来から、暦として重宝されてきた。農耕では暦が重要で、種まきや収穫の時期を何時にするか、といったときに、昔から、月の満ち欠け、あるいはそれを基準とした暦を頼りにしてきた。

そうだった、農耕に役立ってきた月に感謝の意を込めて、収穫された作物をお供えて感謝の意を表した。この句では、具体的に何の野菜といつておらず、畑のものと素朴な言い方をしてるのも面白い。

蓑虫やわれも通勤手ぶら族

鶴見 遊太

サラリーマンの通勤風景を見てみると、しつかりとスーツにバックを持って真面目そうに出勤するものもいれば、一切鞆類は持たず手ぶらで自分の体のみで出勤するものもいる。どちらが良いのか、どちらが格好がいいのか判定は出来ないが仕事で自宅に持ち込まない姿勢は結構なことである。蓑虫はありのままのものを身につけながらも、一本の糸に縋って生きているが、人間も会社という糸に縋りながら今日も通勤をしている。

山は神里は仏の草の花

岩永 充三

日本は昔から神仏習合の考え方が主流であったようで、人々の暮しの中には神と仏が常に共存していた。秋は山や野に名もない草が花をつける。人々の暮しにとって山は遠くから崇めるように慕ってきた思いがあり、里は正に人々の暮しの場であり、そこには常に仏が見守ってくれている。神と仏が生活の身近な所から私たちを温かく見守ってくれていることへの感謝の思いがあった。

空と同じ広さの花野独り占め

鈴木 浩子

昔、森山良子の歌で「この広い野原いつばい」という歌があったが、この句も健康的な明るい句である。見渡す限りの花野、空は快晴で真っ青な空が広がっており、遙か彼方の地平線で空と花野が繋がっている。実際は地上と空の広さを比べようがないが、空と一体となった花野の雄大さがこの句からうかがえる。まして、その空間を独り占め出来たらこれ以上の賛沢はないかも知れない。(以下略)